過去を確認しながら次に進んでいかなければいけない。

川内知子さん

城見町●当時7歳

当時、小学校1年生。夏休みに入ってすぐのことでした。うろ覚えですが、雨の音がパチパチ、バチバチという大地を打つような音をたてていた記憶があります。昔はテレビもなく、ご飯を食べたらすぐ寝なさいと言われ、私と弟は早くから寝かせられていました。途中、起きたときには母がろうそくをつけて窓からずっと外を見ていました。子どもながら大変なことになったと思ったことを覚えています。

翌朝、起きたら雨は降っていませんでしたが、家に女性の人が何人か避難してきていました。何年も経ってから母から聞いた話ですが、眼鏡橋近くに住んでいた知り合いが避難してきたそうです。母の話では、ほかにも避難してきた人たちがいて1週間ぐらいはいたということでした。それから母は、夜、「前を流れていく人が見えた」「どうすることもできなかった」「激しく降る雨の音の中で、どこからか畳が浮く！

という声が聞こえた」と私に話してくれました。私の家は当時、本諫早駅の裏のあたりで石垣の上にあり、道路よりも高かったのですが、そこの石垣すれすれまで水がきていたそうです。

父は、その日から救助にまわっていたと思います。しばらく姿を見ませんでしたが、何日かして帰ってきました。でも、勝手口の前で家には上がらず、カッパを着たまま帽子だけをとってお茶漬けを食べ、ほんの何分かしてからすぐまた出て行きました。

災害後は、お水と食料がとても大変だったそうです。水道も止まり、お風呂も沸かせず。何日かして自衛隊の人たちが天祐寺でしたか臨時のお風呂を作ってくれたということです。その後は、夏休みでもあり、子どもがうろうろしては邪魔で危ないので家にいなさいと言われ、家で弟と2人おとなしくしていました。

2学期が始まり学校に行きましたが、同級生が何人か被害に遭っていました。今もかすかですが印象に残っているのは、クラスでとても優秀で元気のよかったK君だったと思います。机に向かってぼおっとしていたことです。目の焦点が合っているのか、いないのか。お父さんもお母さんもみんな亡くなったということを聞き、子ども心に近寄れない雰囲気を感じ、誰も話しかけることができなかったような記憶があります。

この水害で人生が狂ったという人がたくさんいます。災害というのはそれくらい恐ろしいものです。いやおうなく人生を狂わされる恐れがあるのです。自然をなめてはいけないということを強く感じます。

水害から50年、水害で多くの人が亡くなっています。私たちはこれからもそれを忘れないように、過去を確認しながら次に進んでいかなければいけないと思います。

災害の時は避難が第一、命があれば何でもできます。

井手康盛さん

森山町●当時15歳

中学校を卒業してすぐ四面橋近くの天満町にある深川自転車店で住み込みの修行をしていました。当時15歳のことです。そこには夫妻と長崎からきていた兄弟子の4人がいました。水害の前はずっと雨が降り続いており、当日はすごい土砂降りでした。たしか、夕方6時ぐらいに天満町が水につかったと思います。それから一度水がひいたのだと思います。私たちはその晩も雨がひどいので早く寝ようということになり、店舗の地階にある部屋で寝ていました。そして夜9時45分ぐらいのことです。気づくと畳が天井近くまで浮き上がっていて慌てて階段を上がり店舗へと避難しました。しかし、水がどんどん流れてきて、まず雨戸がはずれ、ガラス窓がはずれ、それから一気に店舗の中に水が押し寄せてきました。私たちは夫妻と一緒に天井裏へ上がりました。

夫妻は何十年もここに住んでいてこういうことは絶対にないと避難しようとは思っていなかったようです。後から聞いた話ですが、近所の人が戸をたたいて避難するよう教えてくれていたそうですが、そのときはまったくわかりませんでした。もし、そのとき逃げていればみんな助かったのかもしれません。

4人で天井裏にいるときに上の家の人が流されて「助けて」という女の人の声が聞こえました。しばらくして、家がぐらっと傾くのがわかり、私たちも家ごと押し流されました。家は一回しずみ再び浮かび上がりました。ちょうどそのとき瓦が外れたので兄弟子がどろ壁のすき間を破って兄弟子と私は屋根の上に出ました。流されているときは普通の流れではなく、すさまじい流れでした。ちょうど今の『すみれ』の前で渦に巻かれ私たちはもう助からないと思っていました。それからどんっと何かに当たり私たちは小山のようなところへ放り出されました。しばらくしてわかったのですがそこは眼鏡橋でした。たくさんのがれきがひっかかり小山のようになっていたのです。私と兄弟子は必死でその上に登りました。上に上がると2人の人がいました。1人は近所の人で、もう1人は永昌から流されてきたと言っていました。永昌の人はすごい大怪我をしていたようです。そこで私たちは一晩中トタンのようなものをかぶり4人で救助を待っていました。その日の夜、11時くらいに安勝寺に避難したと思います。それから歩いて連絡をとろうと諫早駅まで行きましたが電話も何も通じませんでした。そして、自分たちが住んでいたところに戻りましたが、わずかな基礎が残っていただけで周りはえぐられ何も残っていませんでした。その後、私たちは夫妻を探しました。1週間後、ご主人は仲沖町の田んぼで腰から下が埋まった状態で亡くなっているのが見つかりましたが、奥さんはしばらく見つけることができませんでした。そのときは夏だったので遺体は1週間から10日もすれば姿が変わります。そのままにしてはおけないということで遺体は写真と特徴があるものを残し、焼かれていました。とにかくそれは悲惨な状況でした。

あの当時を振り返れば、まだありありと記憶が残っています。しかし、600人以上が亡くなった中でよく生きられたというのが実感です。私たちは眼鏡橋があったおかげで幸運にも助かりましたが、眼鏡橋周辺の人たちはそのために被害が広がったと言います。私たちは運良く生き延びられましたが、そこにいた人たちはみな地獄をみたでしょうね。今思えば、もう少し早く避難していれば犠牲も少なかったのではと思います。今は、行政が進んで訓練なども行っています。災害のときは避難が第一。財産どころではありません。命があれば何でもできますから。そう、強く思います。